

定例記者会見

第35回南方熊楠賞について

日時 令和7年3月19日（水） 午前11時～

出席者 真砂 充敏 田辺市長
山本 良明 文化振興課長
横矢 啓治 南方熊楠顕彰館 主任
崎山 年貴 南方熊楠顕彰館 主査

担当課 南方熊楠顕彰館（直通0739-26-9909）

南方熊楠賞

南方熊楠翁の研究対象であった、民俗学及び博物学関係の分野において、国内外を問わず顕著な業績のあった研究者を、人文部門、自然科学部門から毎年交互に選考しています。

- ◆平成2年制定
- ◆本年35回目を迎える
- ◆昨年までの受賞者46名（本賞37名、特別賞8名、功労賞1名）



南方熊楠賞



第35回受賞者（自然科学の部）

松浦 啓一 氏

国立科学博物館名誉研究員

専攻：魚類学

南方熊楠賞

◆主な功績（選考報告より抜粋）

- フグ目の分類学的研究やサンゴ礁に生息する魚類の生物地理学的研究に取り組み、多くの新種を発見するとともに、その分類体系の見直しを進める
- 世界各地の魚類標本の調査を進める過程で、魚類コレクションのコンピュータ管理や日本産魚類データベースの構築に取り組む
- 自身の業績を数多くの論文や教科書、児童向けの図鑑などにまとめ、同分野のさらなる発展に向けた土台作りや後継研究者の育成に貢献

**数多くの業績と生物多様性研究の発展に寄与する研究は
南方熊楠賞にふさわしい**

南方熊楠賞

第35回南方熊楠賞授賞式・記念講演

日時：令和7年5月10日（土）午後1時30分～

場所：紀南文化会館 4階 小ホール

内容：1. 授賞式

2. 記念講演

「魚類の多様性研究：

魚類分類学からデータベース構築まで」

第 35 回

南方熊楠賞

記者会見資料

田辺市・南方熊楠顕彰会

【目次】

南方熊楠・南方熊楠賞について	1
南方熊楠賞運営協議会名簿	2
南方熊楠賞選考委員名簿	2
第 35 回南方熊楠賞（自然科学の部）選考報告	3
〃 受賞者略歴	4
〃 受賞コメント	6
トロフィー制作者略歴	7
授賞式・記念講演について	8
歴代受賞者一覧	9

南方熊楠翁は 1867 年 5 月 18 日（慶応 3 年 4 月 15 日）和歌山市に生まれ、幼時より天才の名をほしいままにし、東京大学予備門（現東京大学）に入学、2 年後退学渡航、米国各地を彷徨、高等植物から菌類・地衣類まで、さまざまな植物を採集、後英国に渡り大英博物館に迎えられ、「ネイチャー」「ノーツ・アンド・クエリーズ」に多くの論考を発表、その学識の深さは古今東西にわたり碩学の名をほしいままにする。

1900（明治 33）年帰国、1904（明治 37）年より田辺に居を定め、雑誌・新聞への投稿、変形菌（粘菌）・菌類を主とした植物の研究に没頭するとともに、エコロジー（エコロジー＝生態学）という言葉を使い、明治政府が推進した神社合祀に反対するなど自然保護に尽力した。

民俗学分野では、日本民俗学の父といわれた柳田国男氏をして「日本人の可能性の極限」と言わしめ、その学殖の豊かさから、様々な質問を受け、回答したものが往復書簡集として発行されている。

植物学分野では、新種の変形菌を多数発見し、自宅の柿の木で発見した新属新種の変形菌（粘菌）は、ミナカタの名を冠せられた。また、高等植物、コケ類、地衣類、藻類、菌類、変形菌類合わせて 3 万点以上の標本を残した。

1929（昭和 4）年、昭和天皇を神島に迎え進講、1941（昭和 16）年永眠した。

.....

田辺市と南方熊楠邸保存顕彰会（現：南方熊楠顕彰会）では、翁没後 50 周年記念事業を計画、種々様々な顕彰事業を実施した。

1990（平成 2）年 10 月 20 日、南方熊楠翁没後 50 周年記念式典を開催し、市民の誇りとして翁の偉業を称え「南方熊楠賞」を制定した。

この賞は、国内外を問わず翁の研究対象であった民俗学的分野、博物学的分野の研究に顕著な業績のあった研究者に贈り、また特別賞として翁の研究に顕著な業績のあった研究者に、それぞれ賞状（線崎稻村氏揮毫）及びトロフィー（故 建昌覚造氏制作）並びに副賞（本賞 100 万円、特別賞 50 万円）を贈るものである。

表彰は、例年、年一研究者とし、人文部門、自然科学部門から交互に選考をするものであるが、本年は、自然科学部門よりの受賞者選考となった。

第 35 回南方熊楠賞の受賞者選考については、選考委員会において慎重に審議、選考し、南方熊楠賞運営協議会において受賞者を「松浦啓一氏」に決定した。

南方熊楠賞運営協議会名簿

会 長	真砂 充敏	田辺市長、南方熊楠顕彰会会長
副会長	曾我部 大剛	南方熊楠顕彰会常任理事、高山寺住職
監 事	西江 拓矢	朝日新聞和歌山総局長
監 事	狼谷 千歳	田辺市教育委員会教育次長

南方熊楠賞選考委員名簿

【自然科学の部】 ※第 35 回時

選考委員長	石井 実	大阪府立大学名誉教授
選考委員	川井 浩史	神戸大学特命教授
選考委員	遊川 知久	国立科学博物館植物研究部多様性解析保全グループ長
選考委員	辻 外記子	朝日新聞科学みらい部大阪担当部長

【人文の部】 ※第 34 回時

選考委員長	小松 和彦	国際日本文化研究センター名誉教授
選考委員	小長谷 有紀	国立民族学博物館名誉教授
選考委員	鈴木 則子	奈良女子大学教授
選考委員	藤橋 一也	朝日新聞文化部大阪担当部長

第 35 回南方熊楠賞選考委員会は、受賞者として、国立科学博物館名誉研究員の松浦啓一氏を選出した。松浦氏は 1971 年に東京水産大学（現東京海洋大学）を卒業後、1978 年に北海道大学大学院水産学研究所を修了し、水産学博士を取得された。その後、1979 年に国立科学博物館動物研究部研究官に就任され、同主任研究官、同室長、同部長、同特任研究員を歴任された後、2013 年国立科学博物館の名誉研究員となられた。

松浦氏は、動物分類学者として、国立科学博物館において一貫して真骨魚類の系統や分類、生物地理、生態に関する研究に従事してこられた。具体的には、フグ目に分類される種の分類学的研究やサンゴ礁に生息する魚類の生物地理学的研究に取り組み、多くの新種を発見されるとともに、その分類体系の見直しを進めてこられた。また、国内各地のみならず太平洋熱帯域の多くの島々において調査活動をされたほか、世界各地の博物館に保存されている魚類標本の調査も進められ、その過程で魚類コレクションのコンピュータ管理や日本産魚類データベースの構築に取り組みられたほか、国連食糧農業機構（FAO）の魚類同定ガイドの作成、世界分類学イニシアティブや地球規模生物多様性情報機構（GBIF）における活動など、この分野の研究の発展を支える基礎となる活動や発展途上国の研究人材の育成にも大きな貢献をしてこられた。魚類の生態研究についても、松浦氏は黒潮のような強い海流が海産魚類の拡散に寄与するだけでなく、移動を妨げる障壁となっていることを発見し、遺伝子を用いた個体群解析によりその仮説を立証するなどの成果をあげられている。

松浦氏は、学界においても日本魚類学会の会長、日本分類学会連合の代表や、国際魚類研究会議の委員、日本学術会議連携会員等を歴任され、この研究分野における指導的な役割を果たされたほか、最近では国立沖縄自然史博物館の設立に向けた活動にも尽力されている。これらの研究と社会活動の業績は、140 編を超える原著論文・総説のほか、数多くの著書、教科書や図鑑として公表され、魚類の生物多様性と生態の理解を深め、また同分野のさらなる発展に向けた土台を作る上で顕著な貢献をされた。これらの出版物には児童向け、一般向けの図鑑や普及書も多く含まれ、一般市民の魚類の多様性や生態への関心を高めるほか、同分野の後継研究者の育成の上でもきわめて大きな役割を果たしている。

選考委員会は、魚類を対象とした分類学および生物地理学などの分野において、数多くの優れた業績をあげ、また生物多様性研究の発展に寄与するさまざまな活動を行ってこられた松浦啓一氏を、第 35 回南方熊楠賞に最もふさわしい研究者であると評価し、受賞者として選考した。

まつうら けいいち

松浦 啓一 氏 (国立科学博物館名誉研究員) 専攻：魚類学

略 歴	<p>1971. 3. 25 東京水産大学 増殖学科 卒業</p> <p>1973. 3. 25 北海道大学大学院 水産学研究科 修士課程修了</p> <p>1978. 12. 25 北海道大学大学院 水産学研究科 博士課程修了</p> <p>1979. 4. 1 国立科学博物館 動物研究部 動物第 2 研究室 研究官</p> <p>1989. 7. 1 国立科学博物館 動物研究部 動物第 2 研究室 主任研究官</p> <p>1995. 4. 1 国立科学博物館 動物研究部 動物第 2 研究室 室長</p> <p>1995. 4. 1 東京大学大学院 理学系研究科 助教授(併任)</p> <p>2003. 4. 1 東京大学大学院 理学系研究科 教授 (併任)</p> <p>2006. 7. 1 国立科学博物館 標本資料センター コレクションディレクター</p> <p>2011. 4. 1 国立科学博物館 研究調整役、(兼)動物研究部長、昭和記念筑波研究資料館長</p> <p>2013. 3. 31 国立科学博物館 定年退職</p> <p>2013. 4. 1 国立科学博物館 特任研究員 (～2014. 3. 31)</p> <p>2013. 4. 1 国立科学博物館 名誉研究員</p> <p>■学会活動</p> <p>1981～1982 日本魚類学会庶務幹事</p> <p>1982～1987 日本魚類学会編集幹事</p> <p>1984～1985 2nd Indo-Pacific Fish Conference 組織委員会委員</p> <p>1992～1997 日本魚類学会編集委員長</p> <p>1993～1995 全国科学系博物館協議会調査委員会委員</p> <p>1995～1997 Scientific Committee Member, 5th Indo-Pacific Fish Conference</p> <p>1996～1998 全国科学系博物館協議会調査研究委員会座長</p> <p>1996～2000 (財) 食品流通構造改善促進機構水産物表示適正化推進協議会委員</p> <p>1997～2000 日本学術会議動物科学研究連絡委員</p> <p>1997～1999 自然史学会連合運営員</p> <p>1998～2023 Scientific Committee Member, 6th Indo-Pacific Fish Conference</p> <p>2000～2001 日本魚類学会副会長</p> <p>2002～2003 日本魚類学会会長</p> <p>2004～2005 日本魚類学会副会長</p> <p>2004～2005 日本分類学会連合代表</p> <p>2006～2007 日本魚類学会会長</p> <p>2007～2010 Global Biodiversity Information Facility, 1st Vice Chair</p> <p>2008～ American Society of Ichthyologists and Herpetologists 名誉会員</p> <p>2014～2020 日本学術会議連携会員</p> <p>2017～ 日本魚類学会名誉会員</p> <p>■受賞歴</p> <p>日本動物分類学会賞 (2011 年)</p> <p>デジタルアーカイブ学会功労賞 (2020 年)</p> <p>瑞宝双光章(2024 年)</p>
-----	--

学 位	水産学博士
研究活動	<p>専門は魚類の分類学、系統学、比較形態学、動物地理学であるが、熱帯および温帯の岩礁性魚類やサンゴ礁性魚類を主な研究対象としてきた。とりわけフグ目魚類については、多くの論文を出版している。これまでに日本の北海道から琉球列島までの沿岸域を幅広く調査するとともに、西部太平洋の熱帯域（東南アジアからミクロネシアの島々やマーシャル諸島、ソロモン諸島のサンゴ礁や藻場）を調査してきた。</p> <p>研究の成果は 230 編以上の学術出版物（論文及び著書）として発表するとともに、魚類ばかりではなく、動物全体に関する分類学の教科書や自然史研究の歴史、博物館の歴史や標本構築に関する著書も出版した。</p> <p>さらに、国内の自然史標本のデータベースを構築するためサイエンス・ミュージアムネット (S-Net) という全国レベルの活動を組織した。S-Net には現時点で約 740 万件の標本データが収録され、1 年に約 20 万件ずつデータが増加し続けている。さらに、生物多様性情報に関する国際組織である生物多様性情報機構 (GBIF) の副議長を 2007 年～2010 年に努め、生物多様性に関する世界的なデータベースの発展のために貢献した。</p>
主要著書	<p>『Triggerfishes and their allies』 Matsuura, K. and J. C. Tyler. Academic Press 1995</p> <p>『Fish collection building in Japan, with comments on major Japanese ichthyologists』 Matsuura, K. Collection building. American Society of Ichthyologists and Herpetologists, Special Publication 1997</p> <p>『魚の自然史：水中の進化学』 松浦啓一・宮正樹（編著） 北海道大学図書刊行会 2000</p> <p>『虫の名、貝の名、魚の名 和名にまつわる話題』 青木淳一・奥谷番司・松浦啓一（編著） 東海大学出版会 2002</p> <p>『小学館の図鑑 NEO 魚』（新版） 井田齊・松浦啓一（監修） 小学館 2003</p> <p>『動物分類学』 松浦啓一 東京大学出版会 2009</p> <p>『毒魚の自然史—毒の謎を追う』 松浦啓一・長島裕二 北海道大学出版会 2015</p> <p>『したたかな魚たち』 松浦啓一 KADOKAWA 2017</p> <p>『日本産フグ類図鑑』 松浦啓一 東海大学出版部 2017</p> <p>『回転寿司になれる魚図鑑』 松浦啓一（監修） 主婦の友社 2018</p> <p>『けなげな魚図鑑』 松浦啓一 エクスナレッジ 2020</p> <p>『Fish diversity of Japan: Evolution, zoogeography and conservation』 Kai, Y., H. Motomura and K. Matsuura, eds. Springer 2022</p>

松浦 啓一

南方熊楠翁は自然史科学と民俗学の研究者として、19世紀後半から20世紀前半に活躍され、「知の巨人」と呼ばれています。熊楠翁に因んだ賞を頂けることは私にとって望外の喜びであり、名誉なことと思っております。私の研究生活を振り返ると、大学院生時代の指導教官をはじめとして、研究者仲間や家族など多くの方々のお世話になりました。改めて感謝したいと思います。

熊楠翁は変形菌と植物を研究しましたが、私の研究対象は水中にすむ魚類です。研究対象は異なりますが、生物の分類や分布などを研究した点では熊楠翁と共通点があります。魚類は脊椎動物の中で最も種数が多く、約37,000種が知られています。魚類は我々になじみ深い生き物ですが、毎年、約300種の新種が報告されており、新種報告のペースは減少していません。日本に目を転じてみると、国土は狭いのに（全世界の陸地面積の0.25%）魚類の多様性が極めて高く、2024年末時点で日本から約4,800種（全魚類の13%）が報告され、毎年、新種や日本初記録の魚類が数多く報告されています。したがって、魚類の多様性を明らかにする研究を更に続けなければならないと思っております。

たてはた かくぞう
故 建 畠 覚 造

○略 歴

1919（大正8）年～ 2006（平成18）年

彫刻家。東京生まれ。抽象彫刻のパイオニアの一人。行動美術協会会員。

1941（昭和16）年 東京美術学校彫刻科卒業。第4回文展で特選。

1950（昭和25）年 行動美術協会に彫刻部を創設、会員となる。

1954（昭和29）年 ベネチアの第1回国際造型美術家会議に出席し、フランスに滞在。
日本国際美術展、現代日本美術展、集団現代彫刻展、宇部現代日本彫刻展。

1966（昭和41）年 ロダン美術館の国際現代彫刻展。

1967（昭和42）年 アントワープ国際彫刻ビエンナーレ展などに出品、抽象彫刻の展開に重要な役割を果たした。

父、建畠大夢（和歌山県有田郡清水町出身、1880（明治13）年～1942（昭和17）年、本名 弥一郎）は著名な彫刻家であり、帝展審査員を務め、東京美術学校教授、官展系の代表的彫刻家として活躍した。

○受賞歴

1941（昭和16）年 文展特選

1941（昭和16）～1942（昭和17）年 直土会賞

1943（昭和18）年 野間賞

1966（昭和41）年 国立近代美術館賞

1967（昭和42）年 高村光太郎賞

1981（昭和56）年 中原悌二郎賞

1982（昭和57）年 長野市野外彫刻賞（美ヶ原）、和歌山県文化賞

1983（昭和58）年 ヘンリームーア大賞展特別優秀賞

1990（平成2）年 第40回芸術選奨文部大臣賞

2015（平成17）年 文化功労者

○作 品

和歌山県立近代美術館、箱根彫刻の森美術館、美ヶ原高原美術館、長野市野外彫刻、東京芸術大学資料館、和歌山県国体モニュメント、東京銀行本店モニュメント、和歌山県立近代美術館モニュメント、紀南文化会館モニュメント、さいたま博シンボルタワー、東京証券取引所研修センターモニュメント、長野市制100周年記念モニュメント、東京芸術劇場モニュメント、東京都新庁舎議会棟ロビー彫刻、東京都中央海浜公園モニュメント、和歌山市制100周年記念モニュメント

第 35 回南方熊楠賞授賞式・記念講演

日 時 令和 7 年 5 月 10 日 (土) 午後 1 時 30 分より
会 場 紀南文化会館 小ホール
定 員 200 名 (要申込・先着)
内 容 1. 授賞式
2. 記念講演
(演題)「魚類の多様性研究:魚類分類学からデータベース構築まで」
(講師) 第 35 回南方熊楠賞受賞者 松浦 啓一 氏

○申込方法

電話 (0739-26-9909) または下記の専用申込フォームより受付します。



(URL) <https://logoform.jp/form/nAhC/913762>

○お問合せ

南方熊楠顕彰会事務局

〒646-0035 和歌山県田辺市中屋敷町 36 番地 南方熊楠顕彰館内

Tel : 0739-26-9909 Fax : 0739-26-9913

E-mail : minakata@mb.aikis.or.jp

第1回南方熊楠賞（人文の部）

バーバラ・ルーシュ 氏 【専攻】中世日本文学

日本中世の主要な問題点を再検討し、日本文化を創造した人々の活動を実証的に新たな視角から解明した。

第1回南方熊楠賞（自然科学の部）

神谷 宣郎 氏 【専攻】変形菌

戦前、日本では細胞を生きたまま扱うことがほとんどできなかった時代に、粘菌を活用し、極めて独創的な方法で原形質流動の分子機構を明らかにした。

第2回南方熊楠賞（人文の部）

谷川 健一 氏 【専攻】民俗学

長年在野にあつて研究を継続、民衆文化へ目を向け、柳田国男、折口信夫などの民俗学の成果と課題を多角的、総合的に研究。熊楠翁の視点にも論究した。民衆文化への視点を持ちながら、沖縄文化との比較研究をおこなった。

第3回南方熊楠賞（自然科学の部）

椿 啓介 氏 【専攻】菌類

真菌類の研究で知られ、特に不完全菌類の研究に深く、その雑多な形質の中で分生子（孢子）形成様式という新分類基準を選び出し、分類体系を確立した。

第4回南方熊楠賞（人文の部）

國分 直一 氏 【専攻】人類学・民族学

東アジアの民族文化の比較研究に取り組み、台湾などの各地の発掘調査で、多くの研究成果をあげた。

第5回南方熊楠賞（自然科学の部）

吉良 龍夫 氏 【専攻】植物生態学

森林の生態系について観測と実験、数理的解析を加えて研究。科学的根拠を通して自然保護の大切さを訴えた。

第5回南方熊楠賞（人文の部）

鶴見 和子 氏 【専攻】比較社会学

熊楠の博物学研究が地球規模で行われていたことに気づき、「地球志向の比較学」と題した論文を発表するなど、熊楠研究の新しい分野を切り拓いた。

第6回南方熊楠賞（自然科学の部）

竹内 郁夫 氏 【専攻】細胞性粘菌

細胞性粘菌を用いた発生生物学研究の第一人者。肉眼では見えず、生活サイクルなどが未解明の細胞性粘菌を日本で初めて研究材料として取り上げて研究の基礎を確立、発生生物学研究に多大な功績を残した。

第7回南方熊楠賞（人文の部）

川添 登 氏 【専攻】生活学

建築評論家として活動する一方、在野の研究者として都市民を対象にした新しい民俗学の分野として「生活学」を提唱、体系化した。

第8回南方熊楠賞（自然科学の部）

四手井 綱英 氏 【専攻】森林生態学

森林植生分布や里山林の起源、森林での水と養分の循環や動物の役割など、創意に富んだ研究を発表し、すぐれた研究者を育てた。

第9回南方熊楠賞（人文の部）

加藤 九祚 氏 【専攻】歴史民族学

シベリアや中央アジアなどのユーラシア内陸部全域にわたるフィールドワークをおこない、シベリアの民族に関する記録を古今東西の資料とつきあわせることによって、歴史民族学の新しい分野を開拓した。

第10回南方熊楠賞（人文の部）

上田 正昭 氏 【専攻】古代日本史・東アジア史

アジア、特に東アジアを視野に入れたスケールの大きな日本古代史の研究家。文献史学をベースとしながら、国文学、考古学、民俗学などの研究成果も取り入れ、古代社会を多面的に研究し、とくにヤマト王権成立から律令体制成立期の権力構造の分析や宗教と信仰などを主とする。またその他、その鋭い人権感覚から在日朝鮮・韓国人や被差別部落の問題にも積極的にかかわり、その問題意識から、従来の学統を総合する独自の方法で研究を大成されている。

第10回南方熊楠賞（自然科学の部）

日高 敏隆 氏 【専攻】動物行動学

日本動物行動学のパイオニア。動物行動の生理学的・行動学的・社会学的基礎を確立した意義と貢献はきわめて大きいとの世界的評価を得ている。

第 11 回南方熊楠賞（自然科学の部）

青木 淳一 氏 【専攻】昆虫（ダニ）

土壌中にすむダニの仲間の研究に半生を捧げ、日本に知られるササラダニの約半数を新種として記載。また、ダニの研究を通して環境評価や環境診断の基準の確立、日本土壌動物学の確立に大きく貢献し、各界からきわめて高い評価を受けている。

第 12 回南方熊楠賞（人文の部）

櫻井 徳太郎 氏 【専攻】民俗学

青年期に柳田国男氏に師事し、その後民俗学諸分野にわたる幅広い研究を手がける。殊に民俗宗教の分野では、民俗宗教の社会基盤を追究しての論究は学問的論争を起し、日本の学会でのシャーマニズム研究展開の軸となる業績が高く評価を得ている。受賞に際し、「日本民俗文化の特質を抽出するには、少なくとも周辺民族との比較が必要で、南方学の成果を貪り吸収した」とのコメントを寄せられた。

第 13 回南方熊楠賞（自然科学の部）

本郷 次雄 氏 【専攻】菌類分類学

1945（昭和 20）年当時、正確な同定が困難であったハラタケ目のキノコの種の特徴を正確に把握し、以来、今日まで 200 種を超える新種を記載するとともに、それを上回る数の日本新記録の新産種を報告しつづけてきた。また、その研究成果は「原色日本菌類図鑑」などで紹介され、これらの著作が日本産キノコ類の紹介に果たした功績は限りなく大きい。

第 14 回南方熊楠賞（人文の部）

佐々木 高明 氏 【専攻】民俗学

東南アジアや東アジアなどの諸国の現地調査を通し、日本人とそのアイデンティティの基礎にある日本文化の形成過程を、「稲作文化」をはじめ「照葉樹林文化」や「ナラ林文化」などの大きな文化類型を設定することにより、さまざまな形で跡づけられた。また、国立民族学博物館の創設に尽力され、その後も同館館長として民族学資料の収集と研究成果を、国内はもとより広く世界に発信し、日本における民族学研究の指導的役割を果たされた。

第 15 回南方熊楠賞（自然科学の部）

柴岡 弘郎 氏 【専攻】植物生理学

植物生理学、細胞生物学が専門。高校生の時の「向日葵は本当に廻るのか」という素朴な疑問がきっかけで植物学の世界に進まれ、「植物はどのようにして生長するのか」という最も基本的な現象のメカニズムを研究され、生理活性物質と植物ホルモンの相互作用により制御されることを解明された。常に時代を先取りする世界的な研究業績によって植物の生長生理学分野を牽引されてこられた。

第16回南方熊楠賞（人文の部）

岩田 慶治 氏 【専攻】文化人類学

1957年以來四半世紀にわたり東南アジアの稲作民族を調査、日本との比較民族学研究を行い、アニミズムの再考を提唱された文化人類学者、人文地理学者。積年のアニミズム研究から、人間にとって必要な根源的な宗教感覚ないしは宗教性を、現代に甦らせた独創的思想家で、岩田学なる独自の学問体系を確立された。

第17回南方熊楠賞（自然科学の部）

伊藤 嘉昭 氏 【専攻】生態学（昆虫学、進化生物学）

生態学や社会生物学が始動しはじめた時代に、それらの学問をいち早く取り入れ、先駆的な業績を公表し、それを一般に広く紹介した。特に、沖縄のウリミバエ対策事業にかかわり、不妊化オスの放飼による防除計画を策定、実行し、沖縄でのウリミバエの根絶に成功された業績は、生態学が社会に貢献した例として世界的にも高い評価を受けている。また、生態学者の視点と純粋な正義感から、米軍によるベトナムでの枯葉剤使用に対する反対声明や沖縄やんばるの森の自然保護活動など、常に自然保護運動に尽くされた。

第18回南方熊楠賞（人文の部）

伊藤 幹治 氏 【専攻】人類学・民俗学

丹念なフィールドワークと膨大な文献による理論研究により、日本という国の民俗文化を集中的に研究する民俗学（フォークロア）と世界の諸民族の社会や文化の比較研究を行う民族学（エスノロジー）という二つのミンゾク学の統合の中から新しい日本人・日本文化論を構築された。

それは二つのミンゾク学の交流の原点に位置し、実地調査と文献研究によりその研究を展開させてきた南方熊楠の学問研究の特質と軌を一にするものと、高く評価された。

第19回南方熊楠賞（自然科学の部）

堀田 満 氏 【専攻】植物分類学

草創期の植物分類学の気概と伝統を継承している最後の植物学者の一人。

氏の植物分類学の研究はサトイモ科から始まり、数々の分類を手がけられるとともに植物の分布形成過程を究明した植物地理学上の功績は高く評価されている。人とイモの関係に関する民族植物学の視点からの論考は、照葉樹林文化論にも大きな影響を与えた。

また、採集された植物標本は約7万点に及び、これらの標本を背景にした植物の多様性に関する圧倒的な知識に基づき、現在もなお、植物をこよなく愛し、植物を求めて各地を精力的に歩きまわり、その保護に心血を注ぐ姿は、南方熊楠翁の足跡を偲ばせる。

第20回南方熊楠賞（人文の部）

山折 哲雄 氏 【専攻】宗教学・民俗学

インドをはじめ、アジアや欧米の宗教思想史の研究を背景にして、日本の民俗文化や日本人の心の問題を広く深く考察し、その考究の深みの中から、日本人の心の問題の未来を見据えた上で、大きなスケールで情報を発信しようとしている。その研究は、欧米の思想を十分に咀嚼し、きわめて広い視野から、日本の民俗文化について考察を加え、日本人のもつ神々の問題や世界観の問題の解明に、旺盛な研究意欲をもって迫ろうとした南方熊楠の研究と通底するところが少なくない。

第21回南方熊楠賞（自然科学の部）

河野 昭一 氏 【専攻】種生物学

植物生態学、植物系統分類学の研究・教育に専念する傍ら、自ら「種生物学研究会」（のちに「種生物学会」に改称）を立ち上げ、数多くの研究者を育て上げるとともに、機関紙「種生物学研究」「Plant Species Biology」を刊行し、数多くの論文を発刊した。京都大学退官後は、日本生態学会自然保護専門委員会委員、NPO 法人地球環境大学理事長などとして、日本の自然、特に中池見湿原の保護、各地の国有林における不法伐採の摘発と保護等に大活躍している。その様子は神社合祀に反対し、活動した南方熊楠翁を髣髴とさせるものである。

第22回南方熊楠賞（人文の部）

森 浩一 氏 【専攻】日本考古学・日本文化史学

多くの著名な考古学者、歴史学者とも、若いころから交流を持ち、いろいろとアドバイスは受けてきたが、誰かを師と仰ぐことはせず、「森古代学」の探究を続けてきた。また、「考古学は地域に元気を与える学問でなければならない」と主張、研究成果を社会に還元するために労力を惜しむべきではないと、メディアへの対応をいとわないなど、調査研究の優れた業績だけではなく、執筆、講演、シンポジウムの企画立案など多彩な啓蒙活動や遺跡保存への働きかけは熊楠翁の生きざまに通じるものがある。

第23回南方熊楠賞（自然科学の部）

杉山 純多 氏 【専攻】微生物系統分類学

フィールドから分子にまで及ぶ幅広い研究を続け、菌類の多様な形態に着目するとともに、環境に応じて変幻自在に変化する菌類について、分子的解析手段を導入してその実体を明らかにし、菌類という生物の生き方の謎の解明に大きな前進をもたらした。このことは、熊楠翁の抱いていた菌類（変形菌類）の謎の解明につながるものである。

第24回南方熊楠賞（人文の部）

石毛 直道 氏 【専攻】文化人類学

食文化研究のパイオニアで、これまで学術的な研究対象となりにくかった「料理」を、それを創作し伝えている人たちの歴史、習俗、暮らし、自然環境などを網羅した生活体系の一つの「食文化」として捉え、人類史的な視野での比較文明論の主要素であることを提示した。未知の食文化を求めて世界各地を訪れ、豊富なデータを集め続けた学問への姿勢は、身近に生息する粘菌を探し求め、世界的学者になった熊楠翁に通じるものがある。

第25回南方熊楠賞（自然科学の部）

井上 勲 氏 【専攻】藻類類

学生時代から一貫して、微細藻類の系統分類学的研究を行い、また「藻類画像データ」をインターネット上に公開して、多様な藻類の世界についての新しい知識を学界・社会に普及させるなど、学術的意義ばかりでなく、啓蒙的な価値の高い研究も行っている。細胞生物学から分類学に及ぶ幅広い研究により、現代的な博物学ともいえる藻類学の分野を推進した業績は顕著であり、南方熊楠翁の博物学を髣髴とさせるものである。

第26回南方熊楠賞（人文の部）

中沢 新一 氏 【専攻】人類学

宗教学を足掛かりとして、人類学や民俗学のフィールドにも歩みを進め、現在は対称性人類学と呼称される領域を提示しており、従来の学問の枠組みにとらわれない研究成果を実現している。特に、独自のアート感覚あふれるフィールドワークの手法を用いる「アースダイバー」は、注目すべき取り組みである。思想アートとでも評すべきこの取り組みは、現代人にとって新しい知見と感性を切り開く可能性をもっていると思われる。中沢氏の独創性とトリックスター的な役割は、人文学のみならず、多くの分野に影響を与えた。

第27回南方熊楠賞（自然科学の部）

加藤 真 氏 【生態学】

学生時代から一貫して、昆虫と植物など多様な生物が複雑に絡み合う共生関係を解き明かし、生態学研究を大きく発展させている。さらに、森林、干潟、湿地など様々な生態系が、多様な共生関係で成り立っていることをつまびらかにすることで、生物多様性、生態系の保全にも貢献。また、植物と昆虫の共生関係だけでなく、森林、湿地、河川、干潟、藻場など様々な生態系で、多様な生物の種間関係を調べ、学術的な意義だけでなく、保全にも役立つ情報発信を続けてきた。

第28回南方熊楠賞（人文の部）

櫻井 治男 氏 【専攻】宗教学

神社合祀問題について、三重県下を主なフィールドワークの対象として「行政村」単位での合祀の事情を具体的に明らかにするとともに、従前ほとんど注目されていなかった、合祀後の地域社会の様相や祭礼行事の持続と変容の内容を解明することに独自の視点を据えて、その結論を導き出している。

第29回南方熊楠賞（自然科学の部）

馬渡 駿介 氏 【専攻】無脊椎動物分類学

一貫して無脊椎動物の種分類学に関する研究に邁進し、特に苔虫動物門に属し淡水から海水に生息する、コケムシと呼ばれる群体性の固着生物の研究に注力。多くの新種を含む日本産コケムシ類の種類相を明らかにした。また、世界中のコケムシ標本との比較研究も行い、いくつかの科・属・種についての分類体系に改訂を加えた。広範な無脊椎動物についてフィールドにおける丹念な調査・研究に基づき種を記載・分類するという姿勢は、熊楠翁の精神に通じるものがある。

第30回南方熊楠賞（人文の部）

北原 糸子 氏 【専攻】歴史学（災害社会史）

災害社会史という知の新たな領域の開拓者であり、災害時における人間行動の研究や情報メディアの社会史的な分析は先駆的な研究として評価されている。また、災害史を歴史学だけの専有物とすることなく、理工学分野の研究者との協同において切り拓いてゆこうとする姿勢が、災害研究分野における「文理融合」の起点の一つになったといえる。東日本大震災後に何度も被災地に足を運び、調査を行う北原氏の姿には、在野の研究者であり、フィールドの人であった南方熊楠を思い起こさずにはいられない。

第31回南方熊楠賞（自然科学の部）

山極 寿一 氏 【専攻】人類学（霊長類学）

大学院在学中にニホンザルの形態特性の変異を調べることから人類学、特に霊長類学研究を開始した山極氏は、その後、研究の場をアフリカに移し、時にはゴリラ語を駆使しながらゴリラの群れに接触した結果、ゴリラの多様な行動様式や社会関係を明らかにした。また、研究活動のみではなく、ゴリラと人間との共存を目的とした基金の設立、ゴリラを中心としたエコツーリズムの可能性についての模索など、その活動は多岐にわたっている。徹底したフィールドワークを行い、自然のサルやゴリラの群れの懐に飛び込むことにより、多くの新知見を得、さらにはゴリラの保全活動等にも取り組む姿勢は、熊楠翁の精神を彷彿させるものである。

第 32 回南方熊楠賞（人文の部）

江原 絢子 氏 【専攻】食文化史

調理という作り手の視点から日本の食文化を深く探求することにより、日本における食物史を開拓し、「和食文化」を学術領域として確立することに大きく貢献した。さらに、功績として特筆すべきは、学会活動を先導し、地方、女性、次世代の研究者養成に大きく寄与している点である。人びとの暮らしのまわりに広がる文化に対して文献渉猟と現地観察を徹底するというスタイルをとっており、その点で南方熊楠の精神に大いに通じていると言える。

第 33 回南方熊楠賞（自然科学の部）

塚谷 裕一 氏 【専攻】植物学

東南アジアの熱帯林をはじめとする国内外でのフィールドワークを通じて、菌根を介して完全に栄養を菌類に依存する「菌従属栄養植物」など、1 つの新属、30 の新種を含む 44 の植物の新分類群を命名したほか、最先端の分子レベルの植物学の研究においても、葉の形態がどのような分子遺伝学的仕組みによって形づくられるかを理解する上での基本といえる「ルール」のいくつかをモデル植物をつかって明らかにし、葉の形態形成における遺伝子経路の解明において世界をリードする研究成果を多くあげてきた。これらの成果は現代のナチュラルヒストリーとして高く評価される業績であり、またその研究成果や植物誌を広く一般に普及する精力的な執筆活動は、熊楠翁に通ずるものがある。

第 34 回南方熊楠賞（人文の部）

松岡 悦子 氏 【専攻】文化人類学

現在の日本社会における最大の課題とも言える、〈妊娠・出産〉に関して、民俗学的研究を継承しつつ、家族やジェンダーの問題として取り上げ、さらに医療化にはらむ問題を、国際的な比較を通じて論じてきた。また、著書のほかに、論文もきわめて多く、さらに看護学や助産学、社会学など多様な分野の研究誌に掲載されていることは、松岡氏の学術的インパクトの大きさを示している。そういった松岡氏の研究は、民俗学の現代的展開として、南方熊楠賞にふさわしいと判断する。

歴代南方熊楠賞（特別賞）受賞者一覧

南方熊楠特別賞 第1回時

長谷川 興蔵 氏

「南方熊楠選集」・「南方熊楠日記」の編集と校訂に尽力し、南方熊楠研究の発展に大きく寄与。

南方熊楠特別賞 第1回時

小林 義雄 氏

南方熊楠翁の菌類彩色図や標本を検討し、「南方熊楠菌誌」と「南方熊楠菌類彩色図譜百選」の刊行に貢献。

南方熊楠特別賞 第7回時

カルメン・ブラッカー 氏

英国民俗学会長の就任講演で南方熊楠の研究を紹介するなど、南方学の研究と海外での紹介に大きく貢献。

南方熊楠功労賞 第11回時

樋口 源一郎 氏

日本における科学映画の第一人者で、国内外の科学映画祭において数々の賞を受賞。90歳をゆうに越えた今日でも、映画製作の第一線で活躍され、特にこの20年間ほどは、粘菌やキノコの生態、生活史の映像化に力を入れられている。

南方熊楠特別賞 第12回時

神坂 次郎 氏

自ら現地に足を運び調査研究された資料に基づき、熊楠翁の人物像を見事に浮き彫りにし、仕上げた数々の熊楠翁をテーマにした伝記小説を通じ「知の巨人・南方熊楠」の名を日本全国に知らしめた業績が高く評価される。

特に、その執筆活動及び卓越した作品の中でも、「縛られた巨人 南方熊楠の生涯 (S62)」は熊楠ブームの火付け役となる等、熊楠翁顕彰に果たした役割は大きい。

南方熊楠特別賞 第13回時

後藤 伸 氏

文系の視点による翁の業績への研究が多数を占めていたなか、自然科学者の視点からその研究に取り組み、自らのフィールドワークを通じて、翁が行った神島を始めとする南紀の植物生態研究を再評価し、また翁が収集した標本類の整理・研究にも多大な貢献をされた。

南方熊楠特別賞 第14回時

飯倉 照平 氏

第1回南方熊楠特別賞受賞者 故 長谷川興蔵氏とともに平凡社刊『南方熊楠全集』の刊行に携わられるとともに、『南方熊楠—森羅万象を見つめた少年』などの著書をもって熊楠翁の業績、人となりを広く世に紹介した。

また、翁の残した膨大な資料の調査を通して「南方熊楠の基礎的研究」を進めている南方熊楠資料研究会の会長として会をまとめられ、その研究業績を同会編の『熊楠研究』に報告し続けるなど、着実な成果をあげている。

南方熊楠特別賞 第23回時

中瀬 喜陽 氏

今日のように進んだ熊楠研究の基礎をつくったパイオニアの一人であり、長年地元を対象にした地域文化の研究に力を傾注してきた。翁が残した書簡や日記等の膨大な資料を根気強く解読し、また翁を知る人への聞き取りを通して、熊楠研究に次々と新資料を加えた。氏はその成果を単に著作としてまとめるだけでなく、市民や研究者を対象に熊楠自筆資料の解読講座を開き、後進の指導にも取り組んできた。さらに、研究者としての活動だけでなく、翁の顕彰事業推進にも大きな役割を果たした。

南方熊楠特別賞 第25回時

萩原 博光 氏

熊楠翁の収集した変形菌類（粘菌類）やきのこ類の多数の標本の整理やその難解な記載資料等の解読・公表に尽力するとともに、その業績を広く社会に発信し、翁の卓越した科学者としての側面を世に知らしめた。

【第 35 回南方熊楠賞受賞者】

まつうら けいいち
松浦 啓一 氏

国立科学博物館名誉研究員
専攻：魚類学
東京都杉並区在住



□選考理由（抜粋）

フグ目の分類学的研究やサンゴ礁に生息する魚類の生物地理学的研究に取り組み、多くの新種を発見するとともに、その分類体系の見直しを進め、さらに、世界各地の魚類標本の調査を進める過程で、魚類コレクションのコンピュータ管理や日本産魚類データベースの構築に取り組むなど、この分野の発展を支える基礎となる活動を展開している。また、自身の業績を数多くの論文や教科書、児童向けの図鑑などにまとめ、同分野の発展に向けた土台作りや後継研究者の育成に顕著な貢献している。このように、数多くの優れた業績をあげ、また、生物多様性研究の発展に寄与するさまざまな活動を展開する松浦氏を、南方熊楠賞にふさわしい研究者であると評価する。

□生年月日

1948年 8月 15日（76歳）

□略 歴

1971年 3月 東京水産大学 増殖学科 卒業
1973年 3月 北海道大学大学院 水産学研究科修士課程 修了
1978年 12月 北海道大学大学院 水産学研究科博士課程 修了
1979年 4月 国立科学博物館 動物研究部 動物第2研究室 研究官
1989年 7月 国立科学博物館 動物研究部 動物第2研究室 主任研究官
1995年 4月 国立科学博物館 動物研究部 動物第2研究室 室長
1995年 4月 東京大学大学院 理学系研究科 助教授(併任)
2003年 4月 東京大学大学院 理学系研究科 教授(併任)
2006年 7月 国立科学博物館 標本資料センター コレクションディレクター
2011年 4月 国立科学博物館 研究調整役
(兼)動物研究部長、昭和記念筑波研究資料館長
2013年 3月 国立科学博物館 定年退職
2013年 4月 国立科学博物館 特任研究員(～2014年 3月 31日)
2013年 4月 国立科学博物館 名誉研究員